

## 富士紀行(61) ウグイスの鳴き方が違う！

(H13/4/7 記)

日本の桜の名所100選に選ばれている富士霊園の桜は中旬頃が見頃になろう。新聞記事によると中央道沿いに1,000本のソメイヨシノが植えられ、カンザクラ、フジザクラ、シダレザクラなど7,600本が並木状や林状に広大な山を埋め尽くしているという。  
(参考：静岡新聞 13/4/1)

ウグイスの初鳴きを聞いた。未だ、完成されたウグイスの囀りではないが、もう少しすれば、皆さん御承知の通りのホーホケキョ（法法華経）と鳴き始めよう。ウグイスの囀りの微妙な進歩を自分の耳で確認してみても如何だろうか。富士学校が所在する小山町の「町の鳥」はウグイスである。隣接する山梨県の鳥もウグイスである。

雄の初鳴きは、春かなり早い時期から聞かれる。御殿場・小山地区では1.2月頃から聞かれるという人もいる。ウグイスの初鳴き前線というのがあるそうだ。この前線は季節の進行と共に北上していく。

須走の小生がかって住んでいた谷浴いの家では、朝早くからウグイスの囀りで目が醒めた程だ。目覚まし代わりにウグイスの囀りであった。残念ながら機密性の良くなった現在の官舎ではそういうことはない。住環境の向上は情緒を失わせるのであろう。自ら努力しなければ、かつてのような情緒を感じる事が無くなった。

ウグイスの囀りは我々にとっては風流と感ずても、ウグイスにとっては己のテリトリーの宣言であり、雌を呼び込むための囀りでもあって、ウグイス人生(?)を賭けた必死の戦いで、餌を採る時間も惜しんで鳴き続けているのだ。宿命とは言え、雄は悲しき哉。古来より、農耕民族は一所に命を懸けてきた(一所懸命)し、妻子を守るために命を捨てる覚悟が出来ていた。ウグイスの囀りから国家防衛に思いを馳せることは飛躍であろうか。

藪の中をチャッ、チャッと言う声を出しながら、移動する。笹鳴きとも言われ、これを藪ウグイスとも言う。谷から谷に響き渡るように鋭くキキキキッキョッキョと鳴くのはウグイスの谷渡りと言われる。

ウグイスの異称(別名)

春告鳥、花見鳥、歌詠鳥、経読鳥、春鳥、匂鳥、人来(ヒトク)鳥、  
百千(モモチ)鳥 等

富士登山道須走口新5合目の案内板には、「ウグイスは富士山を境にして、ホーホケキ

ヨのホケキヨの部分の長さが違う。西に行くほど長い」と言う意味のことが書いてあった。  
(富士紀行19号に記載)面白い物だ。富士・箱根を境にして西と東日本ではモグラも種類が違うとか聞いたことがあるが、実際はどのようなのだろう。乞う御教示！

ウグイスは、巣作りや抱卵は雌だけが実施する。5月末から7月初め頃に繁殖するものは、しばしばホトトギスに托卵される。自分では巣を作らずに、他の種の鳥の巣に卵を産み込み、その後の世話をその巣の親鳥に任せてしまう習性を托卵という。これらの鳥では、雌は自分の卵を1個産み込むと同時に、巣の中の卵を1個くわえとり、飲み込むか捨てるかしてしまう。孵化した雛もすごい。親が親なら子も子だという感じだ。雛は巣内の他の雛よりも少し早く孵化し、未だ孵化していない卵を一つずつ背中に乗せて、巣外に放り出してしまふ。こうして巣内を独占し、その後の親鳥の世話を自分だけのものにしてしまふ。

托卵というのは凄まじいものだ。それにしても健気にも他の鳥の卵とも知らずで真剣に抱卵しているウグイスに憐憫を覚えずにはおれない。だからといってそれが自然界の摂理であるならば是認すべきであろう。浅薄なる同情心は自然界のバランス・理を破壊する。

昔は鶯合(うぐいすあわせ)という鳴き声を競う遊びがあった。現在はウグイスの飼養には許可が必要となっているとのことであり、そのような優雅な遊びは出来ない。古、鶯の糞は美肌効果があるとして美顔料として用いられた。鶯糠(鶯の糞を精製した化粧糠)がそれである。お試しになって如何か。

(参考：百科事典等)